

## 『落窪物語』の垣間見

鹿野谷有希

## 一 はじめに

日本の古典文学でよく描かれる場面のひとつに「垣間見」というものがある。「垣間見(かいばみ・かいまみ)」とは、「物のすきまなどから、こっそりのぞき見ること」であるが、この語は『落窪物語』内で三例使われている。

①道頼が落窪の間にいる姫君を垣間見る場面。「(道頼ガ)「まづ垣間見をせさせよ」とのたまへば……」(上三六―三七頁)

②一月二三日の昼、道頼が継母を垣間見る場面。「少将(道頼)、つくづくと垣間見臥したり。」(上九〇頁)

③継母が落窪の間を覗き、道頼を見る場面。「(継母ガ)例の、垣間見の穴より覗けば……」(上二〇二頁)

また、「垣間見」という語は使われていないものの、「物のすきまなどから、こっそりのぞき見ること」にあたるものとして、次の場面がある。

④結婚四日目の昼、落窪の間を訪れた継母を、道頼が几帳の綻びより覗き見る場面。「少将(道頼)、いかがあるとゆかしうて、

几帳の綻びより、臥しながら見給へば……」(上七六頁)

⑤一月二三日の夜、落窪の間を訪れた少納言を、道頼が見る場面。「少将(道頼)見れば、少納言、火影に、いと清けなりと、よき者こそありけれと見給ふ。」(上九四頁)

⑥道頼が越前守(姫君の異母兄)と対面している様子を、姫君が御簾の中から見守る場面。「女君(姫君)も、御前なれば、(越前守ヲ)見出だし給ひて、あはれと思す。」(下二六頁)

今井源衛氏は、『落窪物語』の垣間見を五例としたうえで、『落窪物語』に現われる五つのかいま見は、全体の筋の上で無意味な、単なるその場限りの興味に終わる挿話にすぎぬようなものは一つも見当たらない、すべてがそれぞれ全体の筋の上にも重要なポイントを占めるものばかりである。

と述べ、うち四例(①②③⑤)について解説している<sup>②</sup>。確かに『落窪物語』の垣間見は、全体の筋の上にも重要なポイントを占めるものばかりであるが、その重要性について、まだまだ深く掘り下げ余地がありそうである。本稿では、『落窪物語』の垣間見がいかに重要であるかを、改めて考察していきたい。なお便宜上、これより

『落窪物語』の垣間見場面は、本節で示した算用数字で表していく。

## 二 最初の垣間見

まずは①を見ていこう。『落窪物語』で最も有名な垣間見のひとつである。

君見給へば、消えぬべく火灯したり。几帳・屏風、殊になければ、よく見ゆ。向かひ居たるは、あこきなめりと見ゆる、様体・頭つきをかしげにて、白き衣、上に艶やかなる搔練の相着たり。添ひ臥したる人あり。君なるべし。白き衣の萎えたと見ゆる着て、搔練の張綿なるべし、腰より下に引き懸けて、側みてあれば、顔は見えず。頭つき・髪 of 懸かりは、いとをかしげなりと見るほどに、火消えぬ。くちをしと思ほしけれど、つひにはと思しなす。(姫君ガ)「あな暗のわざや。人ありと言ひつるを、はや往ね」と言ふ声も、いといみじくあてはかなり。(上三七〜三八頁)

はじめに、道頼が何をどのような順で見ているのか、確認していこう。右の引用はすべて、語り手によって語られている。語り手によって語られているのだから、語り手が見ている可能性もあるが、「あこきなめり」「君なるべし」(傍線部)と推測しており、あこきも姫君も初見であることから、見ているのは道頼と考えてよいだろう。

さて、道頼が何をどのような順で見ているか(波線部)を、あこきと姫君に分けて整理すると、

(あこき) 【全体】様体↓【頭部】頭つき↓【衣装】白き衣、上に艶やかなる搔練の相

(姫君) 【全体】添ひ臥したる↓【衣装】白き衣の萎えたと見ゆる

着て、搔練の張綿なるべし、腰より下に引き懸けて↓【頭部】側みてあれば、顔は見えず。↓頭つき・髪 of 懸かり

となる。道頼はまず、あこきの全体的な雰囲気、そして頭部を見て「をかしげ」と思った後、衣装に視線を移している。初めにあこきを見たのは、あこきがちらを向いて座っているため、思わず目を引かれたからだろうか。その後、姫君の寄り臥す姿態を捉えた後、衣装を見、それから頭部や髪 of 懸かりを見て、顔は見えないけれども「いとをかしげ」だと感じている。

まずは、あこきと姫君の【頭部】に注目してみよう。廣田收氏は「女房のあこきと女君とは身分においては対等でないが、対照的に描かれていることは間違いない。女君の美貌を際立たせるために、あこきが対照的に配置されているとみるべきであろう」と述べている<sup>(3)</sup>。道頼は姫君の顔を見えないため、「美貌を際立たせるため」<sup>(3)</sup>とまでは言えないものの、あこきと姫君の頭部を見て、それぞれ「をかしげ」「いとをかしげ」と思っており、確かに対照的に描かれている。頭部に関していえば、あこきよりも姫君のほうを、より可愛らしいと思ったようである。

次に、あこきと姫君の【衣装】に注目したい。あこきの衣装は「白き衣、上に艶やかなる搔練の相」、姫君の衣装は「白き衣の萎えたと見ゆる着て、搔練の張綿」と言及されている。あこきの衣装

は「艶やかなる」と良い評価をしているのに対し、姫君の衣装は「萎えたと見ゆる」と良い評価はしていない。ここで、「萎えたる(萎ゆ)」の意味について確認しておこう。「萎ゆ」は通常、着古されて糊気がなくなつた衣装の状態を指し、それはしばしば悪い意味で捉えられるが、例えば『源氏物語』帚木卷の「萎えたる衣どもの厚肥えたる大いなる籠にうちかけて」のように、程よく糊気が取れて柔らかな状態を表し、良い意味で捉えられることもある。『落窪物語』では、この他に「萎ゆ」が4例使われているが、いずれも着古された衣装の意味で使われており、当該「萎ゆ」も悪い意味として捉えることができるだろう。

道頼が衣装を見た感想について、ここでは言及されていない。しかし、姫君の元へ忍び込む直前に「心のうちには、衣どもぞ萎えたる、恥づかしと思はむものぞ」(上三八頁)と思つている。やはり、姫君のみすばらしい衣装が気になつたのである。そのことは、姫君が美人かどうかを気にして垣間見たのにも関わらず、頭部よりも先に衣装に目を引かれていることから窺えるだろう。けれども、道頼は衣装によって女性の評価を下げることをしていない。むしろ、姫君が恥づかしい思いをするのではないかと、姫君の心情を慮っている。女性の衣装を気にするような男性だからこそ、みすばらしい衣装を身につけなければならぬ姫君の気持ちも分かるのだろう。

みすばらしい衣装を気にするものの、それによって姫君の評価を下げることはしない道頼と、みすばらしい衣装を気にするがため、自身の評価を下げてしまつている姫君。この対照性は、二人の恋愛

にも影響している。二人の恋愛を、衣装に注目して思い起こしてみよう。この垣間見の直後に、道頼は落窪の間に侵入して姫君に添い臥すが、姫君は「誰ならむと思ふよりも、衣どものいとあやしう、袴のいと悪び過ぎたるも思ふに、ただ今も死ぬるものもがなと泣く」(上四〇頁)と、自分が着ている衣装を気にして泣いている。情交の場面では、「単衣はなし、袴一つ着て、所々あらはに身につきたるを思ふに、いといみじとは疎かなり。涙よりも汗にしとどなり」(上四三頁)と、恥づかしさのあまり、涙よりも汗でぐっしょり濡れている。道頼は帰る際に、姫君の衣を着せようとするが、まともな衣がひとつもないので、自分の衣を置いていく。これを姫君は「いと恥づかしきこと限りなし」(上四四頁)と感じている。その後参上したあききに「いといみじげなる袴、ありさまにて見えぬこそ、いと言はむ方なくわびしけれ」(上四六頁)と語るほど、姫君は逢瀬の衣装を恥じているのである。一方で道頼は、後朝の文に対して姫君から返事がないことに「姫君ガ」我を、いともものしと思はむやは、ただ、かの衣どもを、いといみじと思ひたりつる名残りならむと、あはれに思」(上四八〜四九頁)、うほどで、相変わらず姫君の心情を慮つている。結婚第二夜の姫君は、あききが奔走して集め調えた衣装を身につけたことから、「袴も衣も単衣もあれば、例の人心地」(上五四頁)になつている。姫君が道頼とまともに向かい合えるようになったのは、まさにきちんとした衣装のおかげなのだ。みすばらしい衣装は、姫君の最大のコンプレックスであり、姫君に恋愛を諦めさせるものであるが、道頼の姫君に対する評

価を下げることはなく、むしろ道頼を姫君の気持に寄り添わせる。みすばらしい衣装は、二人の恋愛のキーワードとなっている。①の場面の衣装描写は、二人の恋愛において、衣装が重要なポイントになっていくことを示す役割もあるのではないだろうか。

最後に、なぜ作者は姫君の顔が見えない設定にしたのか、考えておきたい。それは、読者に緊張感を与えるためではないか。この時点において、読者の一番の関心事は、姫君を見たときに道頼はどんな印象を抱くのか、ということだろう。食い入るように姫君を見ていた道頼だが、結局顔は見えず、しかも明かりが消えたために、声だけが姫君の人となりを知る頼りとなってしまう。この場面の直前で、帯刀が「物忌みの姫君のやうならば」(上三七頁)、つまり、もし醜い女であったら、と語ったのに対し、道頼は「笠も取りあへで、袖を被きて帰るばかり」(上三七頁)と、笑いながら答えている。そのため読者は、道頼が姫君を醜い女だと思った場合、この恋愛が終わってしまうのではないかと気が気ではない。この垣間見で道頼が姫君の顔を見て、可愛いと思ってくれば、読者は安心して物語を読み進められるのだが、その安心感を得られることなく、緊張感を持続していく。道頼が姫君にどんな印象を抱き、物語はこれからどのような展開を辿るのか、読者はハラハラしながら物語に夢中なるのである。

### 三 継母の垣間見

次に、③を見てみよう。こちらも①と同様、『落窪物語』の中で

最も有名な垣間見のひとつである。

下襲は縫ひ出でて、袍折らむとて、(姫君ガ)「いかで、あこき起こさむ」とのたまへば、少将(道頼)、「引かへむ」とのたまへば、女君、「見苦しからむ」とのたまへど、(道頼ハ)「几帳を戸の方に立てて、起き居て、「なほ引かへさせ給へ。いみじき事の師ぞ。まづは」とて、向かひて折らせ給ふ。いとつれなげなるものから、心しらひの用意過ぎて、いとさかしらかなり女君、笑ふ笑ふ、折る。(姫君ガ)「四の君のことは、まことにこそありけれ」とのたまへば、「御許されあるを、知らず顔なりや」とのたまへば、(道頼ハ)「もの狂ほし。交野の少将の私の設けむ時はしも、公々しくて取られむ」と笑ふ。

(道頼ガ)「夜、いたう更けぬ。多し。寝給ひね」と責むれば、(姫君ハ)「いま少しなめり。早う寝給ひね。縫ひ果ててむよ」と言へば、(道頼ハ)「一人起き給へるよ」とて寝給へるほどに、北の方、縫はで寝やしぬらむとて後ろめたうて、寝静まりたる心地に、例の、垣間見の穴より覗けば、少納言はなし。こなたに几帳立てたれど、側の方より見入るれば、女、こなたの方に後ろを向けて、持たる物を折る。向かひて引かへたる男あり。なま眠たかりつる目も覚め、驚きて見れば、(道頼ハ)「白き桂のいと清げなる、搔練のいと艶やかなる一襲、山吹なる、また衣のあるは、女の裳着たるやうに、腰より下に引き懸けたり。火のいと明かき火影に、いと見まほしう清げに、愛敬づきをしげなり。またなく思ひいたはる藏人の少将よりもまさりて、

いと清げなれば、(継母ハ) 心惑ひぬ。男したる気色は見れど、よろしき者にやあらむとこそ思ひつれ、さらに、これはただ者にはあらず、かくばかり添ひ居て、女々しく、もろともにするは、おほろけの心ざしにはあらじ、いといみじきわざかな、よくなりて、わが進退にはかなふまじきなめりなど思ふに、物縫ひのこともおほえず、ねたうて、なほ、しばし立てれば、(道頼ガ)「知らぬわざして、まろも極じにたり。そこも、眠たげに思ほしためり。なほ、縫ひさして、臥し給ひて、北の方、例の腹立て給へ」と言へば、(姫君ガ)「腹立ち給ふを見るが、いと苦しきなり」とて、なほ縫ふに、(道頼ハ)「あやにくがりて、火を扇ぎ消ちつ。女君、「いとわりなきわざかな。取りだに置かで」と、いと苦しければ、(道頼ハ)「ただ、几帳に懸け給へ」とて、手づからわぐみ懸けて、掻き抱きて臥しぬ。

北の方、聞き果てて、いとねたしと思ふ。「例の腹立てよ」と言ひつるは、ささぎさわが腹立つを聞きたるにやあらむ、語りにけるにやあらむ、いとねたし。(上一〇一―一〇四頁)

道頼の存在が継母に知られてしまうという、読者にとつて思いがけない出来事が起こる場面であり、最も目を離せなくなる場面のひとつである。ここで、垣間見を持つ性格及び構造について確認してみたい。今井源衛氏は、

いうまでもなくかいま見は「かいま見る者」と「かいま見られる者」との両者から成り立つ行為であり、しかも作品に現われる場合には、読者はその文章を通して、一方には「見る者」の

「目を借りて「見られる者」の容姿を眺めつつ、他方では作者の解説によつて、直接「見る者」の動きと心理とを知り得るのである。すなわち素材としてのかいま見の興味は、これを分析すれば「見る者」を見る興味と、「見られる者」を見る興味との二面から成つていると考えられる。

と述べているが、③はまさに、「見る者」を見る興味と「見られる者」を見る興味<sup>⑥</sup>の両方を堪能できる場面となつてゐる。なぜなら、継母の目を通して「見られる者」(姫君・道頼)の仲睦まじい姿を眺めつつ、「見る者」(継母)が動揺し怒りに震える心理を知り得るからである。この場面で作者は、「見られる者」を見る読者の行為にかんして、一工夫を施している。いったん読者に「見る者」の目を通さず「見られる者」の姿を見せたあと、今度は「見る者」の目を通して「見られる者」を見せているのである。この工夫について、「とて寝給へるほどに」(波線部)に注目しながら詳しく見てみよう。「とて寝給へるほどに」以前では、普通は男性がしない縫物を、共同で仲睦まじく行ない、お互いに軽い嫉妬を見せながら談笑する姿を描いている。「見る者」すなわち継母の目を通さずに描くことができ、読者はようやく結ばれた二人の幸せな姿を、温かく見守ることが出来る。姫君と道頼だけではなく、読者も多幸感に包まれることだろう。けれども、「とて寝給へるほどに、北の方……」と継母が登場することで、状況は一変する。一番見られてはいけない人物に、二人の幸せな姿を見られることで、二人の恋愛が終わってしまう可能性が高くなるからである。読者は驚きとともに、今度は継母の目

を通して二人の様子を眺めることになる。

継母は落窪の間を覗いてまず、男がいることに仰天する。帯刀が姫君の返事を落とした一件により、姫君に男がいることを感じている継母が確認しようとしたのは、男の格と姫君への愛情であろう。

初めに男の格だが、「火のいと明かき火影に、いと見まほしう清げに、愛敬づきをかしげ」に照らし出されている姿を見て、「またなく思ひいたはる藏人の少将よりもまさりて、いと清げなれば」と思っており、自分が大事にしている藏人の少将よりも格上ではないかと危ぶんでいる。そして姫君への愛情だが、共同で縫物をする姿を見て「かくばかり添ひ居て、女々しく、もろともにするは、おほろけの心ざしにはあらじ」と、並みの愛情ではないと感じている。男の格や姫君への愛情が並み以下であったならば、継母がそれほど怒ることはなく、姫君を物置のような部屋に閉じ込めることもなかったかもしれない。読者は継母の目を通して二人の様子を眺めつつ、このような継母の心理も知り得ることになる。継母の心理を知った読者は、継母の今後の行動を警戒しながら物語を読み進めることになるのだ。

作者がまず継母の目を通さずに二人の様子を見せたのは、姫君と道頼の幸せな姿を、ただ純粹に見つめてほしいという思惑のためだろう。一方で、あらかじめ幸せな様子を見せておくことで、継母登場の衝撃をさらに大きくする効果も期待できる。物語において重要な垣間見場面が、いったん読者に「見る者」の目を通さず「見られる者」の姿を見せたあと、今度は「見る者」の目を通して「見られ

る者」を見せるという工夫により、さらにおもしろいものとなっているのである。

#### 四 一二月三日の垣間見

『落窪物語』では落窪の間の、ある一日の様子が細かに描写されている。ある一日とは、帯刀が姫君の手紙を落とし、藏人の少将に取られてしまったその翌日、一二月三日のことである。その描写は、テキストで実に約二〇頁にも渡っており、物語における重要な局面、及び情報が、いくつも含まれている。まずは、順番に整理してみよう。

A 道頼、落窪の間に一晚逗留し朝を迎えるが、帰りそびれて落窪の間に戻る。四の君との縁談があることを姫君に伝え、姫君を別の邸へ移そうと話し、姫君も承諾する。(上八六〜八七頁)

B 藏人の少将、急遽、賀茂の臨時祭の舞人を選ばれる。継母、姫君に藏人の少将の上の袴を縫わせるため、使いを送る。(上八八〜八九頁)

C 継母、追加の下襲を自ら落窪の間に持つていく。道頼、継母を垣間見る。②(上八九〜九一頁)

D 日が暮れて、継母、こっそりと落窪の間を訪れ、縫い物が終わっていないことに腹を立てる。さらに袍を追加で送り、姫君を叱りに行くよう中納言を責め立てる。道頼、中納言の叱責の言葉から、「落窪の君」が姫君のことだと知る。姫君は号泣、道頼は復讐を誓う。(上九一〜九四頁)

E 継母、落窪の間へ少納言を手伝いに行かせる。道頼、少納言を垣間見る。⑤(上九四頁)

F 少納言、道頼と四の君の縁談を姫君に語る。また、交野の少将のことも語る。その後、使いの者が少納言を呼びに来たため、曹司に下がる。(上九五～九九頁)

G 道頼、姫君相手に交野の少将のことを語り、嫉妬する。(上一〇〇～一〇一頁)

H 道頼、姫君の縫い物を手伝う。継母、落窪の間を覗き、道頼を見る。③(上一〇一～一〇四頁)

I 怒りに燃える継母、姫君と典薬助を逢わせる謀を、一晚中思いめぐらす。何も知らない道頼、姫君と語らい、翌朝落窪の間を出る。(上一〇四～一〇五頁)

継母に道頼の存在が知られるだけでなく、復讐の契機となる「落窪の君」名の露頭や、後に姫君に仕える少納言の登場など、物語の今後に繋がる場面が数多くあることに目が行きがちだが、垣間見場面が複数あることも見逃せない。BからFまでの間、道頼は几帳の後ろでずっと盗み聞きをしていたし、もしかしたら几帳の隙間から覗き見をしていた可能性もある。②と⑤は、道頼の垣間見が改めて強調されているだけであり、③場面も併せれば、一月二三日の描写の大半が垣間見場面<sup>②</sup>で占められることになる。

ここで、②と⑤について触れておきたい。どちらも人物の容貌説明を、登場人物(道頼)の視点で行っていることが共通している。まずは②を見ていこう。②は継母の容貌説明だが、実は継母の容貌

説明は二度目である。一度目は④場面で、道頼は垣間見ながら「白き綾、搔練など、よからねど、重ね着て、面平らかにて、北の方(継母)と見たり。口つき愛敬づきて、少し匂ひたる気つきたり、清げなりけり、ただ、眉のほどにぞ、およすげ、悪しげさも、少し出で居たり」(上七六頁)と思っっている。「ただ、眉のほどにぞ……」と低評価を下しているものの、良いと思ったところは褒めており、それなりに客観的に見ているようである。継母の姿を見るのは初めてであり、性格についてもよく知らなかったからであろうかけれども、二度目である②では、「子多く生みたるに落ちて、わずかに十筋ばかりにて、居丈なり。うちふくれて、いとをこがまし」(上九〇頁)と、かなりの低評価であり、ひとつも褒めていない。姫君の鏡箱を持ち帰り、代わりに自分の古びた鏡箱をよこしたり、姫君を罵り、上の袴と下襲を無理やり縫わせようとすると、継母の意地悪な性格を肌で感じ、姫君に対する虐待を知ったことが影響しているのかもしれない。道頼の主観が色濃く反映されているようである。相手の容貌がどのように見えるかは、相手に対する印象によって大きく左右されることを、二つの垣間見場面を使ってうまく表現しているのではないだろうか。

一方の⑤は、少納言の容貌を評価しており、すばらしいと褒めている。⑤について今井源衛氏は、「少将が北の方やあるいは女房の少納言を隙見するのは、(中略)後者ではそれによって少納言の善良な心を知り、後に彼女を自分の邸に迎えて重用するという結末の伏線となっている」と述べている<sup>7)</sup>。確かにそのような面はあるが、

Gで道頼が語る「(少納言ハ)をかしく、もの、聞きよく言ひつる人かな。かたちも清げなりと見つるほどに、交野の少将を、かたよしと褒め聞かせ奉りつるにこそ、(少納言ヲ)見まうくなりぬれ」(上一〇〇頁)に繋げる側面もあるのではないか。道頼は少納言を見て、初めは良い印象を抱くが、道頼と四の君の縁談に関する話で「少将(道頼)、「そらごと」といらへまほしけれど、念じ返して臥し給へり」(上九六〜九七頁)とやきもきしたり、交野の少将の話聞いて嫉妬するなど、少納言の話にどんどん翻弄されていく。⑤の垣間見があるからこそ、「をかしく、もの、聞きよく言ひつる人かな……」という語りが際立つのだ。少納言の話に翻弄されていく道頼を、読者は微笑ましく見守ることになるのである。

意図せず道頼を翻弄した少納言だが、物語における少納言の役割は何だろうか。少納言登場の直前、姫君と道頼を取り巻く雰囲気は最悪であった。「落窪の君」が姫君のことであると、道頼に知られてしまったからである。それにより姫君は「ただ今死ぬるものにもがなど、縫ひ物はしばし押しやりて、火の暗き方に向きて、いみじう泣」(上九三頁)いてしまう。そして道頼は、共に泣きながら姫君を慰め、「いかで、よくて見返してしかな」(上九三〜九四頁)と復讐を誓う。そこに少納言が登場して、姫君の味方だと告げる。すると、姫君は珍しく「うれしくも思ひ給へけるかな」(上九五頁)と喜びの感情を露にし、少納言と会話をしていくうちに、笑顔を取り戻していく。少納言は、姫君に対する中納言邸の虐待を緩和し、嘆く姫君と怒る道頼の雰囲気を変えるのである。

少納言の登場場面と、姫君と道頼が共同で裁縫をおこなう場面は、姫君と道頼の仲睦まじさを色濃く表現している。姫君と道頼の親密さを描くうえで、少納言は必要な人物なのだ。一月二三日の登場となったのは、親密な二人の微笑ましい場面を作り出し、継母垣間見後の暗転と対比させるためであろう。だがそれだけではなく、読者の頭を継母の存在から、いったん逸らすという役割もあるのではないか。思い起こしてみると、Aの前で帯刀が、姫君の手紙(道頼への返事)を落とすというハプニングを起こしており、読者は継母がどういう行動に出るのか、警戒していた。その日、継母は何も行動を起こさなかったものの、翌日、姫君に縫物をさせるために落窪の間を訪れ、中を覗き見るなどしており、読者の警戒は続いているはずである。けれども、少納言が登場し、道頼と四の君の縁談や交野の少将の話をするので、読者の意識は姫君と道頼の恋愛にシフトしてしまう。少納言の二つの話は、テキストでは約五頁に渡っており、かなりの紙面を割いている。道頼と四の君の縁談は、後の復讐に繋がるため、詳しく語る必要があったのかもしれないが、すでに道頼自身がこの縁談を語っているので、ここまで詳述する必要はないはずだ。あえて詳しく描くことで、読者の意識をこちらに集中させようとしたのではないか。少納言の話をじっくり聞いた読者は、続く道頼の嫉妬や、仲睦まじい裁縫の様子を見ることで、継母の存在を忘れ、二人の恋愛に没頭するのである。そこで「とて寝給へるほどに、北の方、縫はで寝やしぬらむとて後ろめたうて」というように、いきなり継母が登場すると、読者はかなりの衝撃を受けるだ

る。また、垣間見においてはふつう、垣間見するほうが優位に立つ。一月二三日の場面はずっと道頼が垣間見しており、道頼優位の状況で物語が進行するため、読者は安心して読み進めることができた。しかし、最後に継母が垣間見することで、あつという間に継母優位へと逆転してしまう。たいへん良くできた構成である。垣間見場面が多用された一月二三日以降、物語はクライマックスへと突き進んで行く。

## 五 おわりに

なぜ、『落窪物語』では六例もの垣間見が使われているのだろうか。それはこの物語が、「秘密」を巧みに利用している物語であり、垣間見は秘密とその露見を描くのに適しているからである。『落窪物語』における主要な秘密を確認しておこう。まず、中納言邸における姫君の存在と彼女に対する虐待は、世間の目から隠されていた。また、姫君と道頼の結婚は、中納言一家にけつして知られてはいけない秘密である。さらに、姫君が道頼の屋敷へ逃がれたことは、しばらくの間中納言一家に対して秘密にされる。

一般に垣間見において、見られている人は見られていることに気付いていないことが多い。少なくとも『落窪物語』の垣間見では、見られている人が見られていることに気付いていない。垣間見するという行為は、秘密を暴く行為であり、垣間見される側にとつては、秘密の露見になる。結論から言えば、①④②⑤は「中納言邸における姫君の存在と彼女に対する虐待」という秘密、③は「姫君と道頼

の結婚」という秘密、⑥は「姫君が道頼の屋敷へ逃がれた」という秘密と関わっている。このことを念頭に置いて、改めて『落窪物語』の垣間見場面を見てみよう。

先述したとおり、中納言家に姫君という娘がいて虐げられていることは、秘されてきた。その姫君が、初めて外部（道頼）の目に晒されたのが①である。ただし、姫君の存在という秘密は、すでにあこきと帯刀によって外部（道頼）に伝えられている。この垣間見ではむしろ、みすばらしい衣装を纏った姫君の姿が晒されたということが、重要だろう。侍女階級のあこきよりもみすばらしい衣装を纏った姫君が、そのあこきと見比べられることになる。侍女以下の扱いをされているという、姫君にとつて恥ずかしい秘密が、初めて外部の目に明らかになるのである。

④と②は、道頼が継母を垣間見る場面であるが、姫君虐待という秘密の露見と関わっている。第四節で述べたとおり、道頼による継母の容姿の描写は、④と②で大いに異なる。これは、継母の姫君に対する虐待を知ったことにより、道頼の見方が変わったためである。また②の直後に、道頼は「落窪の君」という名を耳にし、それが姫君のことであると知る。「落窪の君」と呼ばれていることは、姫君にとつて最も恥ずかしい秘密のひとつであるが、この秘密も露見してしまうのである。

姫君を「ただ今死ぬるものもがな」（上九三頁）とまで悲嘆させたこの露見を、緩和してくれるのが⑤である。道頼が垣間見るなか、少納言は「え避らず候ひ侍る御方よりも、この年ごろ、（姫君

ノ御心ばへも見参らするに、(姫君二) 仕まつらまほしう侍れど、世の中のうたてわづらはしう侍れば、慎ましうてなむ、人知れぬ宮仕へも、え仕うまつらぬ」(上九五頁)と語る。あこぎの他にも中納言邸に姫君の味方がいたことが、姫君と道頼に、そして読者にも明かされるのである。これによって、嘆く姫君と怒る道頼の雰囲気が見えてくる。親密な二人の微笑ましい場面へと続くことになる。

③では、第三節で詳述した通り、姫君と道頼の結婚という最大の秘密が継母に知られてしまう。

最後に⑥だが、これは姫君が御簾の中から、道頼と越前守を見る場面である。中納言家に対する道頼の最後の復讐となる、三条殿移転の妨害を、姫君ははっきりと知ることになる。とここで⑥は、姫君が道頼の屋敷へ逃がれたという秘密を暴く垣間見ではない。この秘密を保持するか解除するかは、道頼がしっかりとコントロールしており、中納言一家がそのコントロールを破るわけではないのだ。⑥で重要なのは、これまで見られる側だった姫君が、見る側へとシフトしていることである。中納言邸にいたころの姫君は継母によって、存在そのものを隠され、行動を随時監視されていた。見る側へのシフトは、姫君が継母の監視という呪縛から逃れ、自由の身になったことの証左なのだろう。

本節で、『落窪物語』は秘密が巧みに利用されている物語だと述べてきたが、秘密が暴かれるのか暴かれないのか、また、暴かれるとすればいつどのように暴かれるのかを楽しむ物語だとも言えよう。

読者が自分で秘密を解き明かしていくスリルがミステリーの醍醐味だとするならば、ミステリーとは違う種類のスリルを味わえるのが『落窪物語』だろう。このスリルを支えているもののひとつが、垣間見なのである。

注1 『全訳全解古語辞典』(山口堯・鈴木日出男編、文英堂、二〇〇四年

一〇月)「かいまみ」項より引用した。

2 今井源衛『今井源衛著作集 第一巻 王朝文学と源氏物語』「王朝物語

構成上の一手法——かいま見について」今西祐一郎・坂本信道編、笠間書院、二〇〇三年三月) 九八頁。 初出『古代小説創作上の一手法——

垣間見に就いて』(『国語と国文学』25巻3号、一九四八年三月)

3 廣田收『源氏物語』「垣間見」再考』(『人文』191号、二〇一三年三月) 一五九頁。

4 『新編日本古典文学全集 源氏物語①』(阿部秋生・秋山虔他校注・訳、小学館、一九九四年三月) 七五頁。

5 四例とは、以下のとおりである。

・北の方(継母)、よしと思ひて、おのが着たる綾の張綿の姿えたるを(姫君二) 着させ給へば……(上二六頁)

・「道頼ハ」心のうちには、衣どもぞ姿えたる、(姫君ガ) 恥づかしと思はむものぞと思ほしけれど……(上三八頁)

・「姫君ハ」御供の人々、姿えたるは、装束一具づつ賜ふ。(下一一九頁)

・「継母ハ」……この子(四の君の子供)のなりの姿えたりつるを思ひつるに、限りなくもうれしくもあるかな」と(言ッテ)……(下一三三頁)

6 注2 論文 八二頁。

7 注2 論文 九八頁。

※ 『落窪物語』 原文の引用は、『新版 落窪物語 上下 現代語訳付き』（室城秀之訳注、角川書店、二〇〇四年二月）に拠り、その上下と頁数を記した。

（しかのや・ゆうき 本学文学部助手）